武蔵野日曜聖書講筵

汝何を見るや
――エレミヤ記第１章11～19節――

１９７４年１月20日
小池辰雄

目覚めの花を見る　沸騰したる鍋を見る　汝何を見るや　滅びを見る　キリストの姿を見る
わが内なる聖霊を見る

【エレミヤ１】

11 エホバの言また我に臨みていう エレミヤよ汝何をみるや 我こたえけるは
巴旦杏の枝をみる 12 エホバ我にいいたまいけるは 汝善く見たり そはわれ速
かに我言をなさんとすればなり 13 エホバの言 ふたたび我に臨みていう 汝何を
みるや 我こたえけるは沸騰たる鍋をみる その面は北より此方に向う 14 エホ
バ我にいいたまいけるは 災 北よりおこりてこの地に住めるすべての者にき
たらん 15 エホバいいたまいけるは われ北の国々のすべての族をよばん 彼等
きたりてエルサレムの門の入口とその周囲のすべての石垣およびユダのすべ
ての邑々に向いておのおのその座を設けん 16 われかれらの凡の悪事のために
我鞫をかれにつげん 是はかれら我をすてて別の神に香を焚き おのれの手に
て作りし物を拝するによる 17 汝腰に帯して起ち わが汝に命ずるすべての事を
彼等につげよ その面を畏るる勿れ 否らざれば我かれらの前に汝を辱かしめん
18 視よわれ今日この全国とユダの王とその牧伯とその祭司とその地の民の前
に汝を堅き城 鉄の柱 銅の牆となせり 19 彼等なんじと戦わんとするも汝
に勝たざるべし そはわれ汝とともにありて 汝をすくうべければなりと エホ
バいいたまえり

（口語訳）

11 主の言葉がまたわたしに臨んで言う、「エレミヤよ、あなたは何を見るか」。
わたしは答えた、「あめんどうの枝を見ます」。12 主はわたしに言われた、「あ
なたの見たとおりだ。わたしは自分の言葉を行おうとして見張っているのだ」。
13 主の言葉がふたたびわたしに臨んで言う、「あなたは何を見るか」。わたしは
答えた、「煮え立っているなべを見ます。北からこちらに向かっています」。
14 主はわたしに言われた、「災が北から起って、この地に住むすべての者の上
に臨む」。15 主は言われる、「見よ、わたしは北の国々のすべての民を呼ぶ。彼

らは来て、エルサレムの門の入口と、周囲のすべての城壁、およびユダのすべての町々に向かって、おのおのその座を設ける。16**わたしは、彼らがわたしを捨てて、すべての悪事を行ったゆえに、わたしのさばきを彼らに告げる。彼らは他の神々に香をたき、自分の手で作った物を拝したのである。**17**しかしあなたは腰に帯して立ち、わたしが命じるすべての事を彼らに告げよ。彼らを恐れてはならない。さもないと、わたしは彼らの前であなたをあわてさせる。**18**見よ、わたしはきょう、この全国と、ユダの王と、そのつかさと、その祭司と、その地の民の前に、あなたを堅き城、鉄の柱、青銅の城壁とする。**19**彼らはあなたと戦うが、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」と主は言われる。**

●目覚めの花を見る

今日はエレミヤの第2回ですが、1章の11節から19節、1章の終わりまで。こないだは「エレミヤの召命」、ベルーフ、いかに神に呼ばれたかと。今日は「汝何を見るや」と題しました。

11エホバの言(ことば)また我に臨みていう エレミヤよ汝何をみるや（文語訳）

11主の言葉がまたわたしに臨んで言う、「エレミヤよ、あなたは何を見るか」。（口語訳）

これはどこであるか分かりませんけれども、彼の故里のアナトテの近所を散歩していて、その時にふと上から臨んだ言葉であると思われます。

我こたえけるは巴旦杏(はたんきょう)の枝をみる

非常におもしろいですね。「巴旦杏(はたんきょう)」は「シャーケード」という字です。「汝何を見るか」というのは、ヘブライ語では、

「何を 汝 見るか」「マー　アッター　ローエー」

という順序になっている。「シャーカッド」という――ヘブライ語はみんな三つの子音から構成されています――動詞からきます。大体、動詞がもとです。「目覚めている」とか、あるいは「目覚める」とかいう字です。「シャーケード」というと「目覚めたるもの」ということになる。巴旦杏はなぜ、

「目覚めたるもの、目覚めるもの」

と言うかというと、春の一番先に咲き出るところの花である。白っぽい花です。直訳すると現在分詞の形ですから、「目覚めているもの」という

「目覚めの花」

というわけだな、巴旦杏というのは。諸々の花の先駆けをなして――春といっても向こうはもう少し寒い――雪をわって出てくるようなわけです。雪割草というのがありますね。それと調子が似ているわけです。そして春が近づいていることをまず先に予告するような

花。ちょうど今、梅が満開になっているが、

「汝何を見るか。梅の花を見る」

というのと同じことです。春に先駆けて梅は咲きますから。こちらでいうと、「梅花を見る」というわけだな。

12 **エホバ我にいいたまいけるは 汝善く見たり そはわれ速(すみや)かに我言をなさんと すればなり**

速やかに実行しようとおもうと。

「われ我が言をなさんと注目している」

と。これは言葉のあやになっている。今度は、「キー　ショーケード　アミン」という。「シャーケード」を今度は「ショーケード」と言いなおしている。ヘブライ語は母音がないですから、

「さぁこれはどっちに読むのか？」

なんてなわけです。ですから、ヘブライ語の聖書は読み方の問題がいろいろあって、いつまでたってもピリオドは打てないです、旧約聖書の研究というのは。ここでは「ショーケード」と読むわけです。「シャーケード」というのは、

「正に今、心をもちいている、目覚めている、注視している、よく見ている」

という意味になるわけです。

「自分が今しようとすることを今心構えしているんだ」

と。それが「正になさんとする」という気持になる。ルッターは、

「目覚めの枝を見る」

というような言い方をしている。「目覚めの」という形容詞にルッターはとったわけですけれども、それは「目覚め」という名前の、こちらでいうと巴旦杏ということになる。

「自分の言葉に対して目覚めてあろうとしているのだ」

と。自分がしようというその言葉に対して。だから、

「なさんと欲することに対して自分は目覚めて、非常に緊張して注目している」

というのが神さまの言葉なんです。だから、

「目覚めの植物を見たということは、よく見た。私の心が分かるだろう」

というわけです。

●沸騰したる鍋を見る

13 **エホバの言 ふたたび我に臨みていう 汝何をみるや**

今度は場所がちがうわけです。これは家の中でしょう、台所かなんか。

我こたえけるは沸騰(にえたち)たる鍋(なべ)をみる

ヘブライ語では「フュール」という字ですけれども、釜のことです。割合に大きな釜みたいな深い鍋です。

その面は北より此方に向う

沸騰しているところの湯気の向き方とでもいいますか、それが北からこっちの方に向かっている。

14 **エホバ我にいいたまいけるは　災　北よりおこりてこの地に**

即ちユダの地に、

住めるすべての者にきたらん 15 **エホバいいたまいけるは　われ北の国々のすべての族をよばん　彼等きたりてエルサレムの門の入口とその周囲のすべての石垣およびユダのすべての邑々に向いておのおのその座を設けん** 16 **われかれらの凡の悪事のために我　鞫をかれにつげん　是はかれら我をすてて別の神に香を焚き　おのれの手にて作りし物を拝するによる**

信仰的な堕落、異教の神々の偶像を拝していることに対する審判が北の外敵を通して臨むぞというわけです。北の方からやって来たのはスクテヤでありまして、当時はもうアッシリヤが少し衰えて、スクテヤにやられているときですから。非常に剽悍なやつらです。その民にね。「腰に帯して」というのは、非常に戦闘的な気分で、「褌を締めて」というのと同じようなわけです。ヨブ記の38章の3節に、

「お前は腰に帯して男らしくせよ」

という言葉がある。

「2 **無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰ぞや** 3 **なんじ腰ひきからげて丈夫のごとくせよ　我なんじに問わん　汝われに答えよ**」（ヨブ38・2～3）

と。口語訳では、

「3 **あなたは腰に帯して、男らしくせよ。わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ。**」

とある。

その面を畏るる勿れ　否らざれば我かれらの前に汝を辱かしめん 18 **視よわれ今日この全国とユダの王と**

「ユダの王」というのは、「ユダの諸々の王」という複数になっている。こないだあげましたね、ヨシヤ、エホアハズとか、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤ、それがユダの諸々の王です。縦の関係ですよ。

その牧伯とその祭司とその地の民の前に汝を堅き城　鉄の柱　銅の牆となせり 19 **彼等なんじと戦わんとするも汝に勝たざるべし**

だから、エレミヤは、

「王様や牧伯や祭司や民や一切の前に一人立て」
というわけです。みんな背いているからダメだと。それでも汝に勝たざるべしと。

そはわれ汝とともにありて汝をすくうべければなりとエホバいいたまえり

ここにも
「共にありて救う」
と。共にあることが汝の力となるという。あと段々読んでいくと分かるように、エレミヤという人は非常に気のむしろ優しい情愛の人です。それが

「堅き城　鉄の柱　銅の牆」

ということでありまして、非常なことを神さまに宣言された。

●汝何を見るや

今日はそれだけのことですが、元へ戻ります。
「汝何を見るや」
という題です。さっき、巴旦杏はこちらでいうと梅みたいなものだと言った。
鈴木梅太郎という人がある。これはビタミンの発見者です。１８７４年から１９４３年の方です。ビタミンの発見者というのはポーランドのフンク〔カシミール・フンク（Casimir Funk, 1884～1967)〕という人が発見したといわれていたけれども、実はその発見した対象はまちがっていた。それよりも1年先にこの鈴木梅太郎さんがオリザニンを明治43年に発見した。そのいわれをみるとおもしろい。梅太郎さんは、日本人を見ていた。正に
「汝何を見るか。我は日本人を見る」
と。日本人を見ていると、どうも小さい、小柄である。同じ食物を食べているのに、なぜ日本人は小柄であるか。こういう疑問を感じた。何か食物に欠けているものがあるのではないか。それで科学者ですから、すぐ実験にとりかかった。常食の白米、玄米をウサギにやった。白米を食べさせているウサギと、玄米を食べさせているウサギとはっきり違ってしまう。白米を食べているのは段々力がなくなって、耳がたれてピョンピョン跳べなくなる。それで、玄米の成分、これは糠だね。だから、日本人は糠味噌というのはバカにならないです。
昨日もある所で食事をしていて、話し合っていて、私の友人で玄米を食べているのがいるんですよ。やはり艶がいいですね。
「小池さんとどっちが長生きするかな」
なんて（笑）。私は玄米と聖霊だったら凄いことになる。
今度はそのウサギに糠を混ぜた水を飲ませているうちにどんどん元気が回復した。そういう実験です。それで糠の成分を分析して発見したのが、このオリザニンというやつです。これがビタミンという間違った名前がそっちへ行ってしまった。大体、日本人というのは

なかなか勘がよかったり、研究もよかったりするのが、とかく外国人にとられている例がいくらもあるらしいね。優秀な学者がみんなよそへ行って使われたり。日本の政府もそんなことはしっかり考えなくてはダメだよ。大いにそういうことに金を費やして、いい学者はちゃんと外国へ行かないようにしてもらいたい。

これが鈴木梅太郎さんの、「汝何を見るか」ということ。ニュートンでもそうですよ。

「汝何を見るか。リンゴが落ちるのを見る」

と。全宇宙の引力を発見する。まぁ「汝何を見るか」で、ゲーテさんなんかはしょっちゅう太陽を見ていた。あそこから彼の文学のエネルギーが来ているわけです。ゲーテの文学から太陽という要素を取ってしまったら、あれだけの無限の展開はなかったろうと思うくらいです。

私もこの御霊の世界へ来たらば、非常に太陽というものが近くなってきた。無教会時代にはそんなことは感じなかった。冥想の世界では、ダンテのように星です。ダンテの『神曲』は地獄も煉獄も天国篇も全部、「ステラ」「星」という言葉で終わっている。それはダンテらしい。

「冥想」「メディタツィオン」

というのは、カトリックの方では、ダンテも天界の一番上の方に冥想の魂を置いているから。ゲーテの方は見る方だ。それはゲーテは肉眼で見ながら、心眼でも見ていたでしょうけれども。

要するに心の目、魂の目で見る。魂の耳で聞く。ベートーヴェンなんかはそうだね。自分の肉の耳では聞こえないけれども、

「汝何を聞くや」

というわけで、天界の音楽を彼は写すわけだ。ベートーヴェン、バッハなんか正にそうでしょうね。第一流の人たちは、芸術に限らず、みなそういった

「汝何を見るか、汝何を聞くか」

と、これに優れているんです。ということは、何か特別なものを見るのではなくて、普通のものを見ていて、そこで普通の人が見ないものを見てしまうわけです。聞かないものを聞いてしまうわけです。

●滅びを見る

その意味において、この預言者エレミヤはやはりちゃんと問題を問題としていたわけだ。問題を問題としていなければ見えない。即ち、今ユダの国は神に背いている。もうこのまま行くと確かに滅びる。だから、

「滅びを見る」

というわけだ。それは4章に出てきます、４章のところにも凄い文句が。滅亡を眼前に見

ている。

日本の精神状態を我々は見る。日本は精神的に滅びに向かっている。

「我々が何を、これからどのようにいくべきか」

という、そういった問題をしっかり意識して、そして、自分の課題――芸術であろうと何であろうといいです――それに取っ組んでいくと、そこから展開が始まる。やはり現実直視ということをぬきにしては観念になってしまうから。

「その現実をどの角度から問題にするか、どの角度からそれを取り扱うか」

というところに違いが出てくるわけです。

ただ相対的次元でもって取り扱っても解決にはならない。ある程度の解決はするでしょう、それも悪くはないでしょう。けれども、もうひとつ奥の次元から、高い次元から、それに取っ組んでいくときに本当の解決の道が生じてくる。

しかし、現実は、人間の世界は解決しきることはない。いつも問題を残します。けれども、残してもいいんです。本当の解決の道を

「根源の現実」「ウル・ヴィルクリッヒカイト」(Urwirklichkeit)

において本当にこれをつかまえ、そして解決していく人が本当の勝利者である。一流の人たちはみなそのことをやっている。絵の世界であろうと、音楽の世界であろうと、学問の世界であろうと、あるいは事業の世界であろうと、医学・医療の世界であろうと、何であろうと、みなそうです。

これがその「汝何を見るか」ということ。さっきの鈴木梅太郎さんはそれで遂にビタミンの発見となった。……。

なるほど、そういう人に従って行くと、山に登れたが、〔その人がいないと〕「さてどっこい」ということになったという。あなた方も、この集会に臨んでいる時は大いにそういったつもりでいるが、

「さてどっこい」

があるわけだ（笑）。まぁそれはいいんですよ、「さてどっこい」でね。段々自分でもって体験しては進んでいく。結局、自分で体験しないことには本ものにならないですからね。しかし、それまでは、受くべきものは充分に目を耳を活眼活耳でもって受けとっていく、全存在的に。そのことが大事です。

私も藤井先生の所に五年間、先生の亡くなるまでご厄介になったけれども、一回も休まずにじっと聞いていました。あまりノートはとらない。まぁごくチョコチョコくらいなもんでね、私は。ノートをとる方は私の家内の方が達者ですけれども。そして質問しないんだ、僕は何も。とにかく聞いている。そして段々こなしていく。しかも私はしばしば、

「藤井先生が今日話すことと同じことを自分が思っていたのに、先生がみな語ってしまった」

なんて、そういうことを時々思いましたけれども。先生とは非常にいろんな意味において似ているものだから、楽に受けとれていたわけです。

そこへいくと、塚本先生は学者で研究の方だから、

「どう研究するか」

という方は塚本先生から教わった。

内村先生は、もうガッとくる預言者的な迫力。

藤井先生は詩人的な、そしてグーッと直感してものをつかんでいくような人。

塚本先生は正に学究的に非常に掘り下げていく。先生は勿論、信仰はしっかりしていますから、そこにちゃんと信仰の味がついているわけです。

手島郁郎君というのは霊的な人物で、これはまた私に非常にプラスした。

まぁ一番先に私の兄貴、小池政美、がいますけれども。正直、私の兄貴の終わりの数年間というものは、今でも印象が非常に深いです。これが第一の種を蒔いてくれた。

そういう五人のひとに相前後して私はついてきたというわけです。まぁ手島君にはついたというわけではないけれども。まぁ龍を描いたとすると、手島君は最後に目を描いてくれたような男です。

それで、私は自分で今度はどしどし進んで行ったわけでしょ。今度の2月の『生命の光』に私の原稿が出ますから、これはよく読んでください。非常にむしろ、ある意味において新しいことを学んだようなことが書いてあった。そういうわけで我々はとにかく進んで行く。

『無者キリスト』はちょっとなかなか簡単に出ません。というのは、信雄〔長男、河出書房の編集者〕が、

「あれをいきなり出しても、ちょっと烈しすぎるから、普通の人はとっつけないから、とっつく道をつけなくてはいかん」

なんて言って、その道の原稿を書かなくてはならないかしらないけれども。そんな簡単にいかないんです、やはり。我々の、信仰の相手に向かってぶちまけているような文字は、いきなり普通の人がみると、とまどってしまうらしいんだな。それをとまどらないようにしなければならない道筋があるらしいから。そういうのは本の編集をやっている者には勘でわかるらしい。まぁいつ出るかは約束しないことにしておきましょう。

とにかく、私たちは、「汝何を見るか」ということをしょっちゅう

「何を聞くか、何を見るか」

を探求しながら、進んでいく。私はお天道さんを見ていて、

「在りて在らしめるもの」

を発見したわけですけれども。

どうぞ、皆さんも、そのようなことで、毎日、真理発見の気持でもって進んでください。

いつか、あなた方はどういう仕事をしていようが、この伝道の責任を持っている、男のひとは。女の方でも勿論、存在的な伝道で結構です――「結構」ではない――それが必然のことですから。この福音を受けとって、人を助けなかったならば、それはちょっと天国へ行きそこなうかもしれない。神さまに恩恵をいただいたらば、その恩恵は人にわかたなくてはダメです。ぜひ、やってください。また、やらざるを得なくなります。そして、人を救えば救うほど、助ければ助けるほど、上から力が来ますから。

●キリストの姿を見る

「汝何を見るか」は結局、そこにおいてキリストを見なくてはいかん。何を見ても、

「この石を割って見よ、そこに私がいるぞ」

という。新約の外典の中に、キリストの言葉の中にそういうのがあるそうです。

「このいと小さき者に水をやるのは即ち我になしたるなり」

と。グリムや何かのおとぎ話にもありますけれども。

そういうことで、我々が体験する究極のものは、そこにおいて

「キリストの姿を見る」

と。太陽を見れば、即ちこれはもう光そのもの、熱そのもの、生命そのもの、また真理、義、愛――まぁ何と言いましょうか――そういった渾然たるものを太陽が表している。

「真理の究極の形は何かというと、円だ」

と私は言いましたね。まぁ角張（かど）っている人は結局ダメなんです。とかく、優れた人はかなり角張ったのが多い。「あの野郎」なんて思ったりね。内村先生も相当角があるね。だから、躓くわけです。手島君もその点がかなり強かったから、躓いたのもかなりいたらしい。

丸いのがいい。まんまる。何といっても、円を描くと、あなた方はこれを見て、何かいやらしい感じがしないでしょ。角張っていると、「あれは」なんてことになる。一切の三角形は円の中に入ると申しました。どんな三角形も全部これは円の中に入ってしまう。西洋の、

「テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ」（正・反・合）

なんていう論法でいくところの理屈の世界を超えたものがこの円現の世界です。

キリストはもの凄いまた烈しい言葉、行為をなさった面もありますけれども、結局一切をあの

「父の全（まった）きが如く」

というあの全さ、全という。この全さは円形です、球形でもいい。宇宙の天体はみな球形です。四角い天体はあるかな。おそらくない。グルグル回転している。だから、「汝何を見るか」と。星を見ても、月を見ても、太陽を見ても、みんなこれは丸いんだから。これは無限無量な内容をもったもの。それは円形。キリストが正に無限無量者である。

そういう意味において、太陽を見ればそういうことになるし。こないだも私は富士山の

ことを話したでしょ。富士山は全く山として典型的な山で、天地を繋いでいるようなわけです。天地を二つなきものにしているのが富士山〔不二山〕。天地融合の姿が富士山です。

まぁそういうことで、「汝何を見るや」と、時々その声を聞く、祈り心で。祈り心で動き、やっているときに、はたと気がつく。ということは、その奥に

「汝何を見るや」

を問われているわけです。はたと気がついて、「ああ」とおもう。藤井先生も言っていました、

「今日はどういう真理にでっくわすか、私はそれを楽しみにしている」

と。この毎日毎日がキリストとの新しい出会いである。そして今度は、外にこの「汝何を見るや」という具体的なものを通して、そこにキリストの心を見る。心が姿となる。キリストの心の姿を見ているうちに、外を見ているうちに今度は、自分の中に入ってくる。

●わが内なる聖霊を見る

あのエマオの話でもそうでしょ。たくさんの旅人がいて、第三の旅人キリストが一緒に歩いてきた。話をしている時にはそのことが分からない。

「夕方になりましたから、どうぞお入りください」

とキリストを中にいれて、あの二人の旅人が食事をとろうとした。キリストがパンを裂いた。祈り心のそのキリストのパンを裂いている姿を見て、正に

「汝何を見るや」

と。これはキリストを見たんです、

「ああ、これはイエスさまであった」

と。するとその瞬間にキリストは消えてしまった。

「イエスさまであったと見た時に、キリストの霊が彼らの中に入ってしまった」

と私は言いました。そこで彼らは喜んで飛び帰ったというわけでしょ。

私たちの中に今度は、本当に内観、内側を観る。ゲーテというひとは、外を見てよく見た人だが、またそれが内に観えた人です。内観です。だから、

「宗教の最後の世界は己自身に対する畏敬の念だ」

と言った。

「己自身に対する畏敬の念」

というのは、内側に「神性」がある。神性をいただいている、これに対する畏敬の念。自らの内なるものに平伏すという。自分を偉いと思うのではない。内なるものに平伏すんです。即ち、その

「汝何を見るや」

の究極のところはそこにくる。内なるものとは「聖霊」です。

「内住の聖霊に対するところの畏敬の念」

その平伏しにおいて初めて本当の権威がくるわけです。これは使徒行伝のペテロ、ヨハネ、パウロがみなその境地です。そういうところにきている。しかし、これは共在の神と、一切のものを貫いてある――「汝何を見るや。巴旦杏を見る」という――貫在の世界。あるいは遍在といってもいい。遍くいたる所に在る。そして、内在、自分の内に在る。

「共在・貫在・遍在・内在」

ということが自在に受けとられる世界。それが本当の、キリストに即ける、神につける在り方なんです。そういう魂になると、もう何ともいえないです、これは。もう一切の主義主張を超越した世界です。

だから、私は、

「無教会主義なんて言っているうちはダメだ」

と言っている。歴史的にはそれは意味はあったけれども、そんなところにいつまでもいて、それにこだわったらダメです。

十字架をいうときにははっきり

「十字架のみ」

みたいなことを言っているけれども、その奥に、

「復活のキリストと聖霊の事態」

が、いつも申し上げているとおり、

「三相一貫」（十字架・復活・聖霊）

で離すことができない。

しかし、いつもそれを言う必要はない。よく、話をする人で、水を漏らさないように何でもかでも言ってしまう人がある。そうすると、聞いている方ではくたびれてしまう。話というのは、その時には或るひとつの一点で結構です、焦点で。しかし、その焦点は深い奥がある。それから出ているところのひとつの氷山の一角みたいなものです。それでいいんです。

今日は、私たちは、「汝何を見るか」ということの貫きの世界をついに、

「内在の聖霊のキリスト」

まで行かないとダメです。

「わが内なるキリストを見る」

という、そこで極まるわけです。

そうしたらば今度は、「汝何を見るか」と返ってくるでしょ。今度はここから一切のものが今度はまた見えてくる、逆に。だから、御霊の世界はそういったグルグル回転しながら、これが螺旋形に動いて進んで行くわけです。一番本当の前進というのはそうなんですよ。天体がそうでしょうが。グルグル回りながらどこかへ向かって進んでいる。

それでもうエレミヤの心はよくつかめたわけです。そして、エレミヤが問題としていた

ことがピタッとそこにきた。春が先駆けて見えてきた。そして、北からスクテヤがやって来る。それが見えてきた。

まぁあのノストラダムスというのは大変なやつだね。16世紀に20世紀の終わりまで見えてしまった。このようなことでもって20世紀が進んでいけば、あの預言の通りにならないとは限らない。だから恐ろしいですね。「大預言」というよりも大警告なわけだ。警告しているわけだ。

日本の教育のことでも何であろうと、結局は単なる政治でも単なる経済でもないんです。昨日の田中首相の言っていることだって、結局、心の問題を言っている。売り惜しみ、買いだめ、みんなこれは心の現象なんです。それがなければ、そんなにあわてることはない。要するに、心が、

「ただ俺だけ儲ければ」

ということをやっている。エコノミカル・アニマル式になってしまっている。人間は本当は、自然に与えられているもので

「足るを知る」

という、昔から言われていることはやはり味あわなくてはいかんわけです。何でも、

「要求、要求。闘争、闘争」

と、また「春闘」なんて大きなことをやるらしいけれども。春闘ということよりか、労資も何もかも全部が本当にそこを顧みて、心からの和解ということをすれば、耐え忍ぶところは忍んでいけばいいのに。そういうことができないんだね、これが社会的には。個人的にはそういう気持を持っていてもね。おかしなもんだね。結局、全ての人がそこに行くことがないという。

また或るひとつの組織というようなものが妙な力になっている。「権利」という言葉が非常に災いになっている。

「こういう権利がある」

という、民主主義というのが。それが喧嘩のもとになる。社会学的にはそういう「権利」という言葉も使わなければならない面も勿論ありますけれども。やはり、その奥に哲学、宗教がどうもなくてはいかんということをつくづく思う。

どうぞ、あなた方はいろんなことを経験なさるけれども、ものの本質から始まるようなことをいつも心がけていただきたいわけです。それでは、今日はこれでおしまい。

あっ、お終いなんだけれどもね、ちょっとまだお終いでなくしておこう。塚本君から手紙がきまして、おもしろいことが書いてあるから。……〔省略〕……。

賛美歌503番「春のあした夏のまひる」を歌いましょう。